

和田家文書をみちづれに 第20回

「語部と歩く東日流」第2弾

令和7年5月13日（火）～5月16日（金）3泊4日

- 1日目 新青森駅⇒三内丸山遺跡⇒石塔山（旧荒覇吐神社・登拝）⇒五所川原市（宿泊）
 2日目 ホテル⇒七理長浜（氷河期埋没林）⇒宝森（安東船造船所跡の地）⇒紅毛崎⇒
 市浦歴史民俗資料館⇒福島城跡⇒山王坊・日吉神社⇒荒磯崎神社⇒龍飛岬（宿泊）
 3日目 ホテル⇒津軽冬景色歌謡碑⇒階段国道（333号線）下る⇒義経寺⇒高野崎（柱状節理）
 ⇒今別⇒大平山元遺跡⇒尻八館（城跡）⇒貝倉神社（貝塚跡）⇒青森市（宿泊）
 4日目 ホテル⇒小牧野遺跡（世界遺産）⇒浅虫・善知鳥岬⇒小湊・雷電宮（十王院）⇒
 善知鳥神社⇒青森駅（15：40頃）着⇒新青森駅（16：00頃）着
 新青森駅 16：38発（はやぶさ32）接続予定



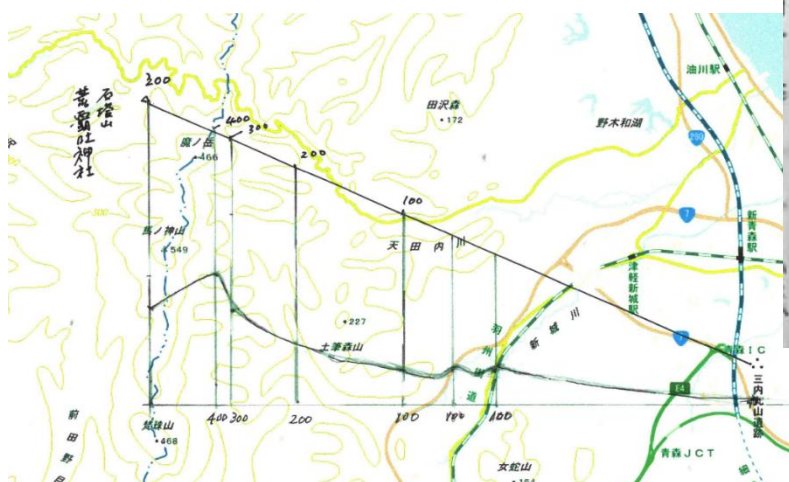
13日

○三内丸山遺跡

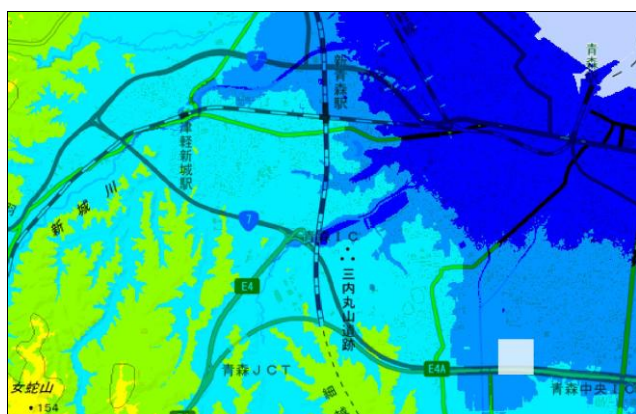
へ名のみして 遺れる王居 **三内**の 外の浜梨 今も香らむ (▼北鑑 第45巻)

○東日流上磯に宇鉄と曰す處あり。太古に山韃の渡人の住居せし處と傳ふ。宇鉄より外浜を湾岸に、大浜には奥内なる飛鳥、後渚なる古宮、羊蹄澤なる耶馬臺城あり。北極星に築城せし隱城なり。大浜**三内**に至りては、東日流王都あり、幾千年に渡る古都ありと、代々の長老の傳ふところなり。また語部録にても明白なり。(▼北鑑 第16巻 四、)

○この史跡に近く、石塔山、坪毛山、飛鳥山、魔神山、**三内圓山**、奥内山と、倭語・丑寅日本語になれる混稱せる地名多しと曰ふ。古にして外浜を合浦大浜と稱し、此の地浜辺は古なる人の大集落たり。大聖地を石塔山に仰ぎ、それに向ひて石神の高樓にヌササンを焚きにける神事ありけるは、海湾遠く丑寅の川内、奥内に見届けられたりと曰ふ。(▼北鑑 第33巻 四)



○合浦の大濱より中山石塔山を望む
古代ハラヤ跡あり。三内と曰ふなり (▼北鑑 第48巻)



○丑寅日本國抄糠部なるイジョ沼跡の遺跡、外濱の三内と奥内、東日流三輪郷及び稻架なる遺跡、上磯のカムイ丘及び石神、下磯なる各處遺跡は多し。(中略) 神を祀りきヌササンとてオテナのハラヤ跡にあり **雲を突くが如き高樓を石神殿**とせるありと曰ふ。(東日流外三郡誌 第360巻)

○馬ノ岳→魔ノ岳

▼[丑寅日本記 第1](#)

アラハバキカムイへの求道

(略) 大元神社・荒脛巾神社・荒磯神社・磯崎神社・荒吐神社・荒神神社・大三輪神社・白山神社・白鳥神社・白山毗畔神社・姫神社・鬼神社・白神山神社、その改名になる荒覇吐神社今に多きなり。

東日流にては巖鬼山神社ぞ、もと三輪村に祀りき大石神堂より鎮移せる神社なり。岩木山なる頂峯三峯ぞ、中央イシカ・右をホノリ・左をガコ神と祀りきは、岩木山神社なる大古の信仰なりと曰ふ。亦、東日流中山にては魔ノ岳・大藏岳(大倉山)・木無岳を連峯にして荒覇吐神三神とせり。

寛政六年十月三日

石塔山管主

和田長三郎吉次

○石塔山 旧荒覇吐神社



▼[北鑑 第10巻](#)

東日流石塔山荒覇吐神由来

奥州東日流石塔山に古代神と祀らる石神をして今に傳はるは、五千年前に創まれる地族ツボケ族が遺せし天地水の神なり。日輪の拝仰せる石門之神を御霊として祀る四方石・ハラハバキ神石・陽神石・陰神石。そして石塔高く築けく造れども、藩策寺社方に享保二年(1717)に三輪村の石神と石塔山石神の仆壊に依りてその散石ぞ今に遣りぬ。然るにや石神なる信仰ぞ今に遣り、古来安東一族に庇護され来たるに依りて、その巨石信仰ぞ本来なる崇拝を欠く事ぞなかりき。

寛政五年九月十九日

和田壱岐

14日

○最終氷河期埋没林



七里長浜出来島海岸(津軽国定公園)約1kmにわたって埋没林があります。

平成6年9月に約2万8千年前の地層から発見されたもの。最終氷期後期の極寒期に洪水などの急激な環境変化によって針葉樹が水没し、その根が水分により、真空パックされたため腐らずに残ったものと考えられている。

樹種；エゾマツ・アカエゾマツ等の針葉樹。



○安東船建造 宝森造船所

1・「北辰之風土記 三」(東日流外三郡誌 第360巻)

「安東高星丸(略)居を藤崎に置いて十三湊を開き、異土との通商を以て一族は榮ひたり。築紫の松浦より宗任の便りと俱に船大工来たり。安東船を進水し異土との商益あり。」

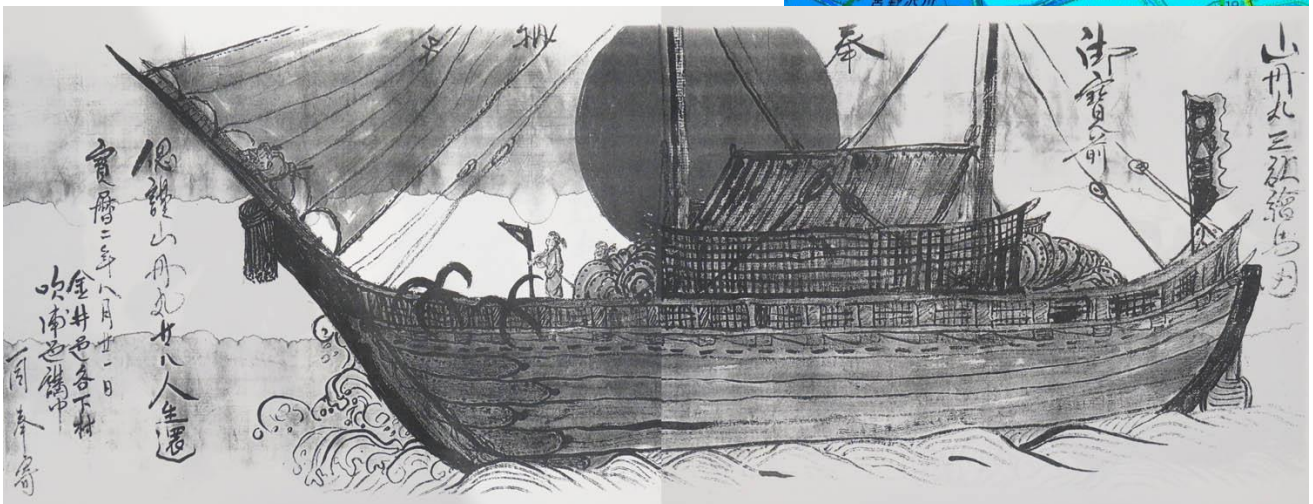
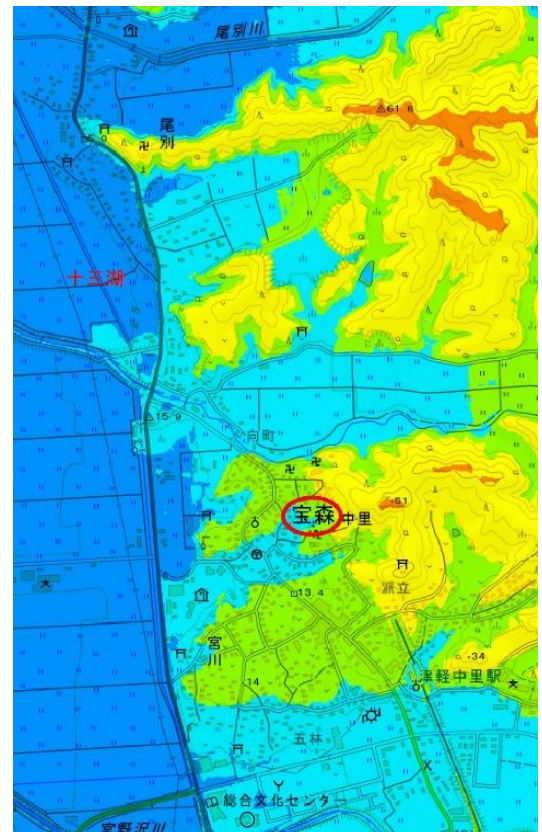
2・「安東治領史」(東日流外三郡誌 第360巻)

「安東一族をして海を道と開ける要因は、築紫の安倍宗任が一書に依れるものなり。」

3・「宗任状」 『北斗抄』

「一族無敵の計は海に候事ぞ。以後の要と奉るべし。六人船大工を遣したる程に能く習候へて、余老逝ならざるに船造り候へて大島に汝相を見さしめ給へとこそ急筆の本報を仕り候。宗任」
→竜骨を持つ船

4・「紅毛國諸神録」(石塔山大山祇神社秘傳 大の2)



久壽三(1157)年 山丹丸の船絵馬史料。

「吹浦より砂沔に航し、肥前松浦に寄りて一路揚州に寄りて中航修船を盡し、摩禮島海を渡る。

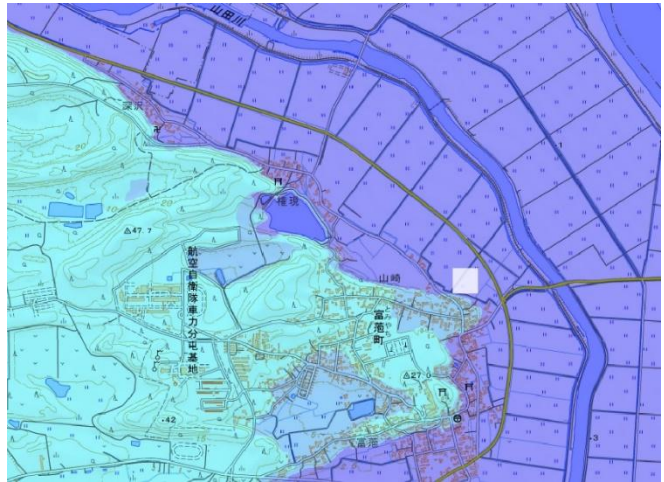
(略) 一路天竺・生露无島を亞羅比亞國紅海に至る。船を志伊治湾に入れ紅毛國に上陸。(略) 紅毛國巡脚せる一切の手記は久壽三年、李竹林は届けたり。」

「起安倍一族源家仇」(永保之再興、など)

「久安己巳(1149)年、十三浦・中野里・寶盛に造船場を築きぬ。」若宮(城界域之事)

○紅毛崎・語部五家鈴木家

①大古より山靱との往来あり。トナリ舟*にて産物を物交せり。依てシキタイ・モンゴル・シュメール・ギリシヤ・トルコの紅毛人らも渡り来たり。古代にては東日流にても紅毛・白肌・青眼の混血人を多く見られたりと日ふ。依て東日流には異人の住める地名あり。紅毛崎・唐崎・鬼澤などありぬ。通稱、鬼と名のあは紅毛人を日ふ。(▼[北鑑 第24卷 二](#))



②古来より山靱より渡来せるは紅毛人及び諸族の歸化人ありて、安倍氏が代々をして是を禁ずことはなかりけり。渡来人に學ぶ事、國益に利あり。地稱になる程になりける紅毛崎・唐崎などの例を各處に遺るは、その證なり。(北斗抄7 鷹羽船之事)

○玉川宏氏解説(私信)

「紅毛崎」の位置は、氾濫を繰り返していた岩木川がどこを流れていた時代かと、十三湖の湖畔の南岸がどこであったかによって位置が異なる。岩木川は氾濫のたびに流れを変えた。

今とは異なり、岩木川は多くの時代、旧金木町から旧中里町までは、今よりも2キロほど東側を流れて北上していた。薄市川のあたりで十三湖に注いでいた。つまり岩木川は、現在の地図いえば鳥谷川のあたりを流れていた。一方、西に目を向けると旧金木町から西側6キロのあたりに、現在は「田光沼」がある。そこから北に山田川が流れている。

「紅毛崎」は、この東西を北上する「鳥谷川」と「山田川」の間で、十三湖に突き出た岬。とはいっても、現「鳥谷川」のあたりを流れていた岩木川の川幅は、500m になったり 1000m にもなったりしていた。また、「田光沼」が「田光潟」だった頃は、田光沼と旧金木町を東西に結ぶあたりが十三湖の湖岸だった。この頃の「紅毛崎」は、旧稲垣町「繁田」のあたりということになる。十三湖は洪水のたびに陸地化したことから、十三湖に突き出た「紅毛崎」の位置は、「繁田」から次第に北に移った。現在の地図でいえば、「紅毛崎」の位置は、「田茂木」「長泥」「豊富」「若宮」と移動した。(文責安彦)



- 一、語部 帶川家
- 二、派立邑 大丸屋家
- 三、昆布掛邑 宮川家
- 四、藤枝邑 金田一家
- 五、紅毛邑 鈴木家

○福島城跡



永享乙卯七年五月、十三湊安東氏の総本城たる福島城、炎上し落城せり。中島棚、羽黒館と同年なり。もつとも、みづからの放火にあらず、堅城を攻めあぐみし南部軍が野火攻めしたるに依れり。福島城を退去せし安東盛季以下の将兵は、唐川城に移りて、鏡城、丘新城、柴崎城とともに、抗戦を続けたり。

○山王坊・日吉神社

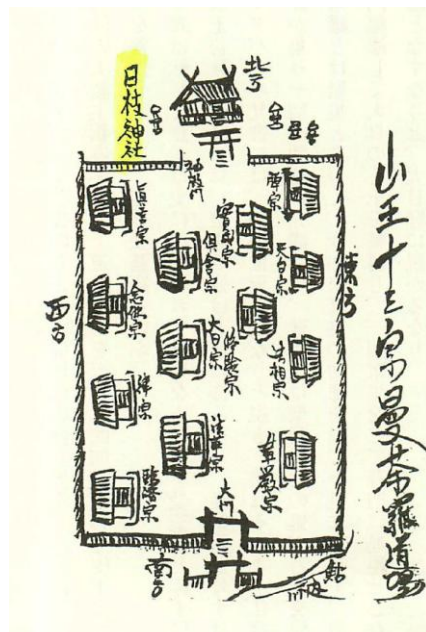
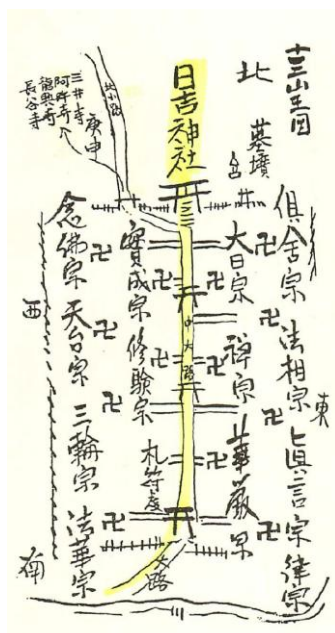
宝剣額



○山王 十三宗寺は安東氏季の養子たる藤原秀榮の建立なり。安東一族の菩提寺にて、藤崎の平等教院と同じく、多宗集併の道場たり。

▼北鑑 第52巻 十二

○十三湊には十三宗各々が十三宗にありき。現代になるは無けれども、嘉吉年代戦乱に山王炎上にて灰と消滅せり。この他、災に消ゆ寺閣ありて、阿吽寺、長谷寺、禪林寺、龍興寺、三井寺、壇臨寺ありぬ。▼北鑑 第26巻



○荒磯崎神社



かつては荒覇吐神社を称した。その後は薬師信仰がこの地に根づき、薬師堂・薬師宮と。神仏分離によって、大己貴命と少彦名命を御祭神とする洗磯崎神社。

14日

○義経寺 三厩地区には、3頭の竜馬がつながれていたうまやだったとされる「厩石（まやいし）」や、義経が自分の甲（かぶと）を置いていったとされる「甲岩」、鎧（よろい）をささげたとされる「鎧島」、帯を締め直したという「帯島」などのゆかりの場所があります。

源頼朝に追われた源義経は竜飛岬まで逃げて、荒れ狂う海を前に守り本尊である観音像を巨石に置いて三日三晩に祈ったところ、白髪の老人と3頭の龍馬が現れ、「三頭の馬を与えるのでこれで海を渡るとよい」と告げられたとのこと。こうして津軽海峡を渡ることが出来たということです。この伝説により巨石は「厩石」と呼ばれるようになり、この土地の名前も「三厩」になっています。



高野崎 柱状節理



大平山元遺跡 外ヶ浜町

陸奥湾に注ぐ蟹田川沿岸の標高 26 メートルの河岸段丘上に立地。サケ・マスが遡上し、捕獲できる河川近くで、石器に適した良質の石材が採取できる。

旧石器時代の終わりごろの特徴を持つ石器群、土器片、石鏃が出土。土器付着していた炭化物の放射性炭素年代測定；紀元前 13,000 年頃か。現在、北東アジア最古級の土器。無文。

重量があり壊れやすい土器；定住生活の開始を示す重要な要素。

土器片の分布；居住空間を想定でき、柱穴や凹みは未発見。地下への掘り込みも無い。住居は移動式テントのようなものか。建築物や土地の造成を行わず、最小限の土地利用で自然環境に適応した生活を送っていた、か。

本資産は、旧石器時代の遊動から縄文時代の定住へと生活様式が変化する様子を示す重要な遺跡です。



尻八城址

安東後潟政季、狼倉城主安東義季と謀り、南部討伐を軍策せしに、鉢巻山城主安倍左京の反忠にて、南部勢の奇襲を被り落城したり。政季捕らるるも、浅虫にて蠣崎蔵人に救われ、宇曽利金鶏城に食客せしかど、渡島に渡り、義季の養子となりて、檜山城主となる。





16 日

小牧野遺跡



縄文時代後期前半の遺跡。青森市野沢字小牧野。国の史跡。「北海道・北東北の縄文遺跡群」として世界文化遺産に登録。「青森市小牧野遺跡保護センター」が開設。

荒川と入内川に挟まれた台地上、標高 145m 付近のところ。1980 年代前半、当時青森山田高等学校に勤務していた葛西励が発掘調査を実施。続縄文時代の遺物を発掘し、遺跡としての認知。1989 年（平成元年）には環状列石を発掘し、竪穴建物跡、湧水遺構、当時の墓、道路状遺構などを発掘した^[3]。



直径 2.5m の中央帯、直径 29m の内帯、直径 35.5m の外帯の三重の輪、さらに外側に、一部四重となる弧状列石や、直線状列石、直径 4m の環状列石などがあり、**直径は 55m** にもおよぶ。

荒川から運んだと推測された石を、縦に置き、さらにその両脇に平らな石を横に数段積み重ね、さらにその脇に縦に石を置いて環状に並べて、出来た環をさらに三重（一部四重）にしている。この並べ方は煩雑で珍しく、「小牧野式」と呼ぶ。配石の中に大型壺形土器（甕棺）もみられる。土器；土坑墓周辺から大量の土器、続縄文文化か。特徴的なもの；三角形岩版や円形岩版。柱穴。

○小湊 雷電宮（十王院）●和田家資料

▼丑寅日本記全 糠部濤史

糠部駒の太祖ぞ、北メリケンなる國より暖寒の親潮を往来しける波濤千里の彼方より渡来しけるものなりと日ふ。日出づる國ぞ山韌をして吾が國を日ふも、吾らが東に見ゆ海の彼方に吾らと祖血を同じうせる民族の居住せる國こそ東の日出づる國なり。

此の國ぞ、萬年の巨木の茂る大森國と日ふ。此の國をアメリカンとも日ふ。住むる人ぞ先住なる民ぞ吾らと同じゆうせる累血民なるも、この國に紅毛人涉りて先住民を鐵砲に射殺し惨たるものなりと日ふ。自然、群馬驅し野牛突走するさま見事と日ふ。

糠部の太古になれる史に曰く、此の國はヌカンヌップ亦は津保・都母とぞ呼稱さる。宇曾利と續くる古代史証に於て成れる人跡は古きなり。

淨法寺及び西法寺の建立、閉伊に國分寺の佛跡今に残影なし。慈覚法師の巡脚に遺る恐山靈場、安倍一族が鐵を採せる安倍城、前九年の役にて日本將軍賴良を討ったる宇曾利冠者・安倍富忠らの憤起、南部守行が應永十七年に糠部に根城をかまへて成せる糠部武士の威勢ぞ、東日流に無敵たる安東一族を渡島・飽田に故地放棄をなさしむ歴史の遺せる果斷武勇の甲州源氏の流胤、誠に以て天晴なり。

津保化族發祥の地なれば古史太古にして石神の遺跡、數々に秘める日出づる東海^{の地濱より外濱なる内海に、}糠部水軍なる小湊の安東一族の日本將軍・安倍國東は、糠部の景に號けたる氏名と日ふなり。

圓空坊阿闍梨の遺文に曰く、

丑寅之日本國、為脚赴至糠部、望平々大草原、遊自在駒群、昇東海旭日、拜中尊曼荼羅兩界、如觀赴巡脚。更丑寅宇曾利山即恐山之異景、黃泉赴諸靈、此之山相集、在娑婆界生々在可之、残念迷冥、南無阿彌陀佛之攝取不捨、是救濟淨門押開定佛場茲。

壬申三年(1572? 元龜) 圓空



[1632?~1695] 江戸初期の臨濟宗の僧。美濃の人。生涯に 12 万体の造像を発願し、諸国を遍歴、布教しながら、円空仏とよばれる仏像を多数制作した。

▼北鑑 第 49 卷

ゝ鳴り渡る 冬 いかづち □ 寒空に 鷺の飛び交ふ 小湊の朝

▼東日流六郡誌 6 安日山淨法寺末寺 建立年

延久庚戌年	東日流十三千坊阿吽寺	長暦戊寅年	奥州松島巖島日輪寺
長和甲寅年	怒干怒布 <u>糠部小濱十王寺</u>	長久壬午年	秋田清水安日山山王寺
寛仁己未年	東日流阿闍羅千坊中尊寺	寛徳庚申年	奥州阿武久潤津保化山大元寺
萬寿丙寅年	飽田檜山霞澤淨明寺	永承戊子年	武州陀摩山坊中尊寺
長元康午年	東日流中山千坊梵珠山梵場寺	天喜癸巳年	越州三國白山大白山寺
寛仁丁巳年	奥州衣川平泉佛頂寺		

建久庚戌元年八月十二日 奥州荷薩丁安日川邑 安日山淨法寺控

○浅虫・善知鳥神社

二、善知鳥神社改興

南面朝臣東日流奥法郡行丘城主北畠公の奉寄に依りて合浦外濱に善知鳥神社再興す。其の落慶は康正丙子年なり。此の地領は北畠朝臣の治配と勅許の故なり。

社神は神州倭より奉り、わだつみの神及び天神地神の尊を鎮め給ふて今上に至れり。社は大鳥居三立にして御神門をかまえ、左右に大臣神像を門神とし、拝殿中宮奥宮に壮嚴たり。日出づる安浮に末社、水濱に北辰宮を祀り、潮上に神殿大鳥居を施し、宮辺に潜泳せる善知鳥の群亦、冬鳥・白鳥及び鴨の渡来神秘たり。本社善知鳥と號くるは是故也。

此の神社になる旧来歴は大化己酉六年、上毛野形名丑寅日本國の日本將軍安倍致東に和睦に奉寄せし神社なりきも、倭朝の律令に否なれば致東の怒りを蒙りて、上毛野形名、越に去り淳足柵に防人を募り更には磐舟柵にも防人を募りて拳兵せんと謀るも勅許ならず世泰平たり。

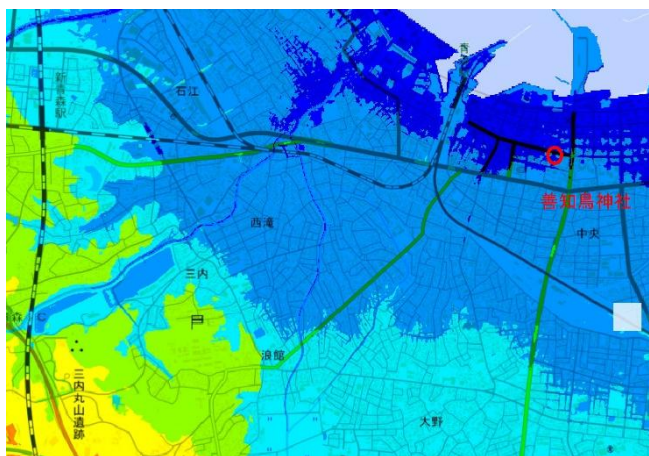
是ぞ日本丑寅の國神・荒霸吐神天地水三柱の神護なりとて、衆の信仰を集むと日ふは善知鳥神社なる由来の實傳にて東日流語部録に證せるところなり。依て他説の社傳は後説造話にて信じるに足らん。

此の神に訪れたる佛僧多し。円空坊・円仁坊・西行坊ら歌を外濱に題して多し。

安永己亥年五月六日

善知鳥神社

氏子 棟方與四郎



▼北斗抄7 宇濤安浮之事

宇曾利・鬼振・東日流を双股に外濱の根をなせる處を宇濤安浮と日ふなり。此の地に善知鳥神社ありけるも、もとなるは、かく鳥の名を用ふなし。謡曲に扱ひたるもその以前にして、書に或は歌集に斯かる鳥の名ぞ絶え、見えざるは訝しき事なり。

一條兼良の書きたる、『鴉鳶いくさ物語』に曰く、

ゑ子を思ふ 泪の雨の 蓑の上に
うとうとなくは やすかたの鳥

かく歌ありぬ。亦、鶺鴒の文字もありぬ。吾妻鏡に*□多宇未井の地、郡中名字に鶺鴒と見ゆれば、善知鳥と筆なすは後のことならんや。

多宇未井=**有**多宇未井（うとうまい）館跡がある。吾妻鏡によると、1189（文治5）年の大河兼任の乱の際、最後の攻防の地が有多宇未井。有**多宇**未井は鳥頭前。

亦、夫木抄に曰くは次の如くなり。（詠み人知らず、とある一安彦）

ゝ奥の海 汐干のかたの 片思ひ
おもひやゆかむ みちのながてを

西行法師が外濱に巡脚せしは、東日流中山の靈場にして、魔神山の坪毛山・石塔澤に荒覇吐神社を尋ねしに、その所在を當らず。安洩の善知鳥神社に訊ねたるありは、二つの思ひにありける。一つは、つばの石文。もう一つは、平泉の藤原氏が建立せし外濱の終要なる卒塔婆を奉納せし荒覇吐神社のことなり。

文化元年六月二日 白井光義

夫木和歌抄 (Wikipedia)

『夫木和歌抄』は、鎌倉時代後期に成立した私撰和歌集。選者は藤原長清。

『万葉集』以来の和歌のうち、勅撰和歌集に採録されなかったものを収集したもので、採録した和歌は17,387首、歌人数は約970人という巨編である。全36巻からなり、これを主題別に591カテゴリーに分類してある。原典となる和歌集が既に散逸するなどして現存しない和歌を多く含んでおり、国文学研究の上で重要な資料に位置づけられている。

長清法名蓮昭

此夫木和歌抄者、藤原朝臣長清自撰也、昔中頃之歌仙之家集、竝代々勅撰に漏るゝ和歌を拾集所也、自今以後之爲勅撰之、又此道に志あらむ人のために、世之嘲を不顧集置者也、又夫木抄と名付事、今案に非ず、此鈔之名を思案して少しまどろみて有ける夢の中に、白衣之老翁一人来日、汝所撰之和歌抄者、我朝之至寶也、未代之證歌成べし、倭國之風俗なれば扶桑集と可名付と謂れけるを、夢心地に是は誰人にて御座ぞと問ければ、我は是和歌の道に心を留し、江中納言匡房と云者也とて夢覚めぬ、此由を冷泉黃門爲相卿に被申ければ、爲相卿此事稀代不思議之靈夢、未代之希特、誠我朝之深秘鈔也、但扶桑者日本國總名也、可有其憚扶の字のつくり桑の字の木を取合て、夫木和歌抄と名付

